

(3) ブラジルのエスニック社会

移民と混血の歴史

混血の国といわれるブラジルの人種構成は多様である。まず、ブラジルにおける移民と混血の歴史をみてみよう。

ポルトガル王に仕えた第二回インド遠征隊のペドロ・カブラルは、一五〇〇年に現在のバイーア州ポルトセグーロに漂着し、その土地をブラジルと名づけ、ポルトガル領とすることを宣言した。ブラジルという地名の語源は、カブラルの遠征隊に同行していた貿易商によって発見されたパウ・ブラジルという木である。この木は、当時のヨーロッパでは貴重だった赤色染料の原料となった。

その後、ポルトガル人による移民が一五三二年から始まり、一八二二年にブラジル帝国として独立するまでの約三〇〇年間、ブラジルはポルトガルの植民地であった。その間のブラジル経済を支えたのが、一次産品の輸出である。天然木であるパウ・ブラジルの輸出経済は乱伐によってすぐに廃れ、代わってサトウキビの輸出が盛んになった。

最初に入植したポルトガル人の多くは、大土地所有制のもとで、サトウキビを生産する農場（ファゼンダ）の農場主となった。彼らが農場の労働者として最初に利用したのが原住民である。しかし、白人が持ち込んだ伝染病や農場での過酷な労働により原住民は激減した。それに代わって

労働力となったのが、奴隷貿易によってアフリカから連れてこられた黒人である。

ブラジルの混血は、白人の農場主と、原住民や黒人奴隷の間で始まった。一般的に混血はメスチーソ（*mestiço*）と呼ばれるが、両親の人種・肌の色によってさまざまな呼称がある。その例をあげると、まず、白人と黒人女奴隷との間に生まれた混血は、ムラート（*mulato*）と呼ばれた。同様に、白人と先住民の混血はマメルコ（*mameluco*）、またはカボクロ（*cabocho*）と呼ばれ、黒人と先住民の混血はカフゾ（*cafizo*）と呼ばれた。さらに、カフゾと先住民との混血はクリボカ（*cuniboca*）、カフゾと黒人との混血はシバロ（*chibarro*）という。このような呼称は人種差別的に聞こえるため、日常会話ではあまり使われない。しかし、ブラジルの小・中学校で使用されている歴史の教科書には、これらの用語が記載されている。

さて、一九世紀に入ると、北東部のサトウキビや綿花に代わって、南東部のコーヒーが輸出品の中心となった。ブラジルの経済は、単一の農産物の輸出に依存するモノカルチャーの性格を強めていった。さらに、一九世紀の後期になると、黒人の奴隷貿易が廃止されて、共和制が樹立された。ブラジル連邦共和国政府は、特にコーヒー農場の労働力を補充するために、海外からの移民を積極的に受け入れるようになった。その結果、ポルトガルばかりでなく、イタリアやドイツなど、ヨーロッパからの家族移民が増加し、白人の割合が高くなった。

さらに、二〇世紀に入ると、一九〇八年、日本からの移民が始まった。日本人移民が最も多かったのは一九三〇年代である。IBGE（ブラジル地理統計院）の資料によると、一九三五年にブラジルに移住したのは四万五〇一二人であった。その主な国籍は、ポルトガル（二五％）、日本（二二％）、ドイ

表1 ブラジルにおける人口と人種構成の変化(1940~2000年)

	1940年	1960年	1980年	2000年
人 口 (万人)	4,124	7,019	11,900	16,959
人種・肌の色 (%)				
白 人	63.5	61.0	54.2	53.8
褐色人	21.2	29.5	38.9	38.5
黒 人	14.6	8.7	5.9	6.2
黄色人	0.6	0.7	0.6	0.5
原住民	—	—	—	0.4
不 明	0.1	0.1	0.4	0.6

出所：IBGE, Diretoria Técnica, Departamento de Estudos de População.

ツ(九%)、アルゼンチン(七%)、イタリア(六%)、アメリカ合衆国(六%)、イギリス(五%)、スペイン(四%)、ポーランド(四%)、フランス(三%)、ウルグアイ(二%)と多岐にわたっている。これら二〇世紀初めの移民の中でも、特にイタリア人と日本人は、コーヒー農場においてコロノと呼ばれる契約労働者として働いたことで知られる。彼らは、ある程度の財をなすと、都市部へ移住して工業労働者になったり、新しい事業を興したりした。契約労働者から最初に脱却したのがイタリア人である。サンパウロは一九二〇年代にリオデジャネイロを超える工業都市となったが、当時の住民の二人に一人はイタリア人だといわれた。現在でもサンパウロには、約二五〇〇万人という世界最大のイタリア人コミュニティがある。また、日本人移民とその子孫である日系人も、サンパウロ州などの都市近郊において、野菜の園芸農業や鶏などの小型家畜の飼育などで独立していった。

人種構成の変化

このようにブラジルでは、ポルトガル人の入植が始まってから五世紀以上が経過し、人種や民族の枠を越えた婚姻が繰り返され、国民の混血が進んだ。その結果ブラジルは、多民族国家の中でも比較的民族差別が少ない社会になったといわれる。例えば、血のつながった両親と子ども・兄弟の間で目や肌の色が異なることは珍しくない。前述した混血を示す呼称とは異なって、子どもの目の色などは、日常会話でもよく話題に上る。

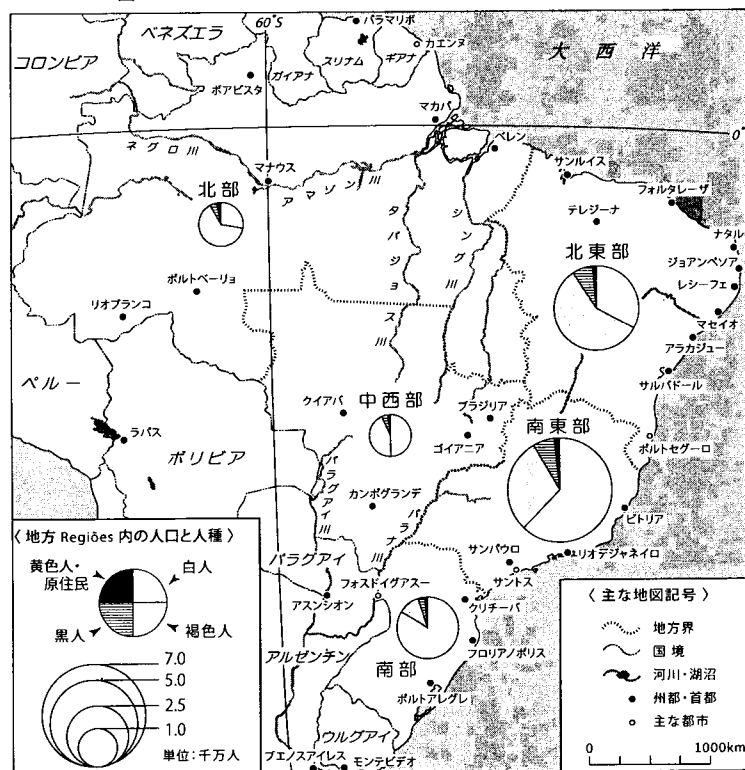
表1は、IBGEによる統計が整備された一九四〇年から二〇〇〇年まで人口と人種構成の変化を示したものである。これに示すように、ブラジルの国勢調査には、人種または肌の色による区分

として、白人(ブランカ)、褐色人(バルダ)、黒人(プレタ)、黄色人(アマレーラ)、原住民(インディジェナ)の五つがある。この区分の中で、人種的な混血に相当するのが褐色人である。なお、これらの区分を決めるのは、現在では被調査者の自己申告である。

二〇〇〇年のブラジルにおける人口は約一億七〇〇万人であり、世界で第五位であった。同年における人種構成の割合をみると、白人五四%、褐色人が三九%、黒人が六%、黄色人が〇・五%、原住民が〇・四%であった。ブラジルと同じように多民族国家であるアメリカ合衆国における同年の統計をみると、白人が七七% (うちヒスパニックが二二%)、黒人が一二%、アジア系が四%、アメリカンインディアンが一・四%、その他の人種が四・四%であった。人種のサラダボウルにたとえられるアメリカ合衆国の社会と比較して、混血が進んでいるブラジルの社会は人種のもつぽとすることができる。

一九四〇年以降の人種構成の変化をみると、褐色人の割合が増加を続けていることに特徴がある。ブラジルの人口は一九七〇年代に一億人を超えたが、ほぼ同じ時期に褐色人が三割を超

図1 ブラジルにおける地方別の人口と人種の分布 (2000年)



においては、ポルトガル人、イタリア人、レバノン人など、ラテン系のヨーロッパ移民に加えて、黄色人の日系人も多いことに特徴がある。

また、ブラジルの都市問題として、貧しい住民が空地を不法占拠して作る貧民街（ファベラ）が知られているが、サンパウロとリオデジャネイロは貧民街が最も多い都市である。サンパウロには、二〇〇〇カ所以上の貧民街に人口の一五％が

えるまでに増加した。反対に減少を続けているのが白人と黒人の割合である。また、黄色人は、一九七〇年代まではほとんどが日系人であり、近年では中国系と韓国系の人口が増加している。しかし、黄色人は人種構成の一％未満である。なお、ブラジルにおいて白人の割合が五割を超えたのは、奴隷貿易が禁止されてから半世紀が過ぎた二〇世紀のことである。一九世紀前半において最も割合の高い人種は黒人であり、一九世紀後半は褐色人であった。

人口と人種構成の地域差

図1は、二〇〇〇年のブラジルにおける人口と人種の分布を示した地図である。ブラジルには連邦直轄区（ブラジリア）を含めて二七の州がある。これらの州は、北部（ホルテ）、北東部（フォルデステ）、中西部（セントロオエステ）、南東部（スデステ）、スル（南部）という五つの地方に区分される。この地図からわかるように、ブラジルにおける人口分布は、稠密な海岸部と希薄な内陸部という東西のコントラストに特徴がある。また、ブラジルの人種構成の分布をみると、褐色人と黒人の割合が高い北部と、白人の割合が高い南部という南北のコントラストがみられる。以下、地方別の人口と人種構成の特徴を説明する。

最も人口が多い地方は、サンパウロやリオデジャネイロなど、ブラジルを代表する大都市を含む南東部である。人口は約七二〇万人であり、ブラジル全体の四三％を占める。主な人種の割合は、白人が六二％、褐色人が三〇％、黒人が七％である。ブラジルの平均と比べて、白人の割合が高いことに特徴がある。また、黄色人の割合が〇・七％に達し、五つの地方の中で最も高い。南東部に

住んでいるといわれる。貧しい農村部から職を求めて都市部へ移住した貧民街の住民は、褐色人や黒人の割合が高い。比較的人種差別が少ないといわれるブラジルであるが、人種ごとの平均所得を見ると、白人が最低賃金の約五倍、褐色人と黒人が最低賃金の約二倍となっている。

南東部に次いで人口が多いのは北東部であり、約四八〇〇万人を有する。北東部における人種構成の内訳を見ると、褐色人が五八％、白人が三三％である。また、黒人の割合は七・七％であり、五つの地方の中で最も高い。北東部はブラジルで最初に移民が始まった地方であり、大西洋岸に沿って州都などの大都市が分布する。これらの都市のいくつかは、例えば、サルバドール、サンルイス、オリンダ（レシフェ近郊）など、UNESCOの世界文化遺産に登録されている。

また、北東部は、財政的に貧しい州が多いことで知られるが、ブラジルでは最も古い移民の歴史を持つことから、料理や音楽などのさまざまなブラジル文化のルーツになっている。例えば、二〇世紀初めにリオデジャネイロで誕生したサンバは、北東部のバイーア州から移住したアフリカ系ブラジル人による音楽が起源である。さらに、アフリカ起源の食材を使用したバイーア料理やアフリカの格闘技を起源とするカポエイラなど、アフロブラジルといわれる文化の中心でもある。

地方別で三番目に人口が多いのは南部であり、約四八〇〇万人を有する。南部の人種構成を見ると、白人が八四％に達する。ブラジルの移民は、故国と同じような気候の土地に住む傾向があるといわれるが、ブラジルの中でも比較的涼しい気候（温暖湿潤気候）にある南部では、ドイツ系の移民が多い。また、ブラジル最南端のリオグランデドスル州には、アルゼンチンとウルグアイから続く草原地帯が広がり、特有のガウーショ（カウボーイ）文化がみられる。ブラジルを代表する肉料

理であるシユラスコは、ガウーショの野外での食事が起源である。

北部と中西部の人口は、両地域あわせて約二五〇〇万人であり、ブラジル全体の一五％にすぎない。人種構成の内訳を見ると、中西部では、白人が五〇％、褐色人が四四％、黒人が四・五％であり、ブラジルの平均とほぼ同じである。また、北部においては、褐色人と原住民がそれぞれ六四％と一・六％であり、五つの地方の中で最も高い。北部のアマゾンア州では、六月二四日が「カボクロの日（混血の日）」として公式の休日になっている。

北部と中西部の面積は広大であるが、熱帯雨林に覆われたアマゾン盆地や、セラード（サバンナ）林に覆われたブラジル台地が広がっており、開発は遅れた。しかし、一九六〇年代以降、熱帯林を肉牛の放牧地にしたり、セラード林をダイズ畑にするなどの農地開発が進んでいる。特に近年ではダイズの生産が拡大している。例えば、南部で小規模な農場を営んでいた白人が入植して、それまで人工物が何もなかったセラード林に突如として「ダイズの町」が築かれた地域もある。

また、原住民の文化について、かつてイエズス会の宣教師は、布教に際して原住民のトゥピ・グアラニー語を使用した。そのため、一八世紀の中頃までのブラジルでは、ポルトガル語よりも原住民の言葉が広く使われていた。現在でも、地名や動植物名などにその単語が残っている。例えば、地名では、パラナ（意味…海）、パラ（川）、イグアスー（大いなる水）などがあり、果物ではカジュー（カシユナッツ）、アバカシー（パイナップル）などがある。

仁平 尊明

※参考・引用文献

- ブラジル日本商工会議所編『現代ブラジル事典』新評論、二〇〇五年
丸山浩明「ブラジル——サンパウロ東洋人地区の華人」山下清海編『華人社会がわかる本——中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店、二〇〇五年、二一九―二二三頁
矢ヶ崎典隆「ブラジル——コーヒーを手がかりに調べる」矢ヶ崎典隆、椿真智子編『世界の国々を調べる』古今書院、二〇〇七年、一四〇―一四五頁
カンボグランド日系コロニアの歩み刊行委員会『カンボグランド日系コロニアの歩み』カンボグランド日伯体育文化協会、二二七―二二九頁
山下清海「ブラジル・サンパウロ——東洋街の変容と中国新移民」『華僑華人研究』第四号、二〇〇七年、八一―九八頁。

コラム
6

ブラジルの日系人

仁平 尊明 ◆

写真は、サンパウロ市、リベルダーデ地区のガルボンブエノ通りを撮影したものである。地下鉄のリベルダーデ駅を降りて、ガルボンブエノ通りを南下し、大坂橋を渡るとすぐに、この大きな赤い鳥居がみえる。手前の鳥居は、一九七四年に建設された最初の鳥居であり、老朽化により二〇〇四年七月に取り壊され、その後ろの新しい鳥居に建て替えられた。この鳥居が象徴するように、リベルダーデ地区のガルボンブエノ通り一帯は、日本人地区として知られる。サンパウロ市の日本人地区には、日本から輸入した食料品や雑貨を販売する店のほか、日本食のレストラン、日本人向けに宝石や薬を販売する土産物店、日本語が通じるホテルなどが軒を連ねている。これらの店舗の経営者は日系人



サンパウロ・日本人地区の鳥居

- ◎飯田耕二郎 ————— 〈いいだ・こうじろう〉
1944年生まれ。大阪商業大学教授。人文地理学専攻。『ハワイ日系人の歴史地理』(ナカニシヤ出版、2003年)、『在米日本人社会の黎明期——「福音会沿革史料」を手がかりに』(共著、現代史料出版、1997年)など。
- ◎石井久生 ————— 〈いしい・ひさお〉
1964年生まれ。共立女子大学准教授。社会地理学、地域研究専攻。「ナバラ自治州のバスク語話者——住民と制度の交差する言語空間」(『共立国際研究』25、2008年)、「バスク自治州におけるバスク語人口の地域的動態とその諸要因」(『地学雑誌』112-1、2003年)
- ◎大石太郎 ————— 〈おおishi・たろう〉
1973年生まれ。琉球大学法文学部講師。人文地理学・カナダ地誌学専攻。「Ethnic persistence of the Acadians and its regional characteristics in New Brunswick, Canada,」*Geographical Review of Japan* 74B (2), 2001、「カナダの英語圏都市におけるフランス語系住民の言語維持とフランス語系コミュニティの発展——ノヴァスコシア州ハリファクス事例」(『地学雑誌』115-4、2006年)
- ◎大島規江 ————— 〈おおしま・のりえ〉
1973年生まれ。国際教養大学国際教養学部助教。都市地理学、社会地理学、ヨーロッパ地域研究専攻。「アムステルダムを歩く——都市発展と移民から読み解く景観」阿部和俊編『都市の景観地理 外国編3』(古今書院、2008年)
- ◎加賀美雅弘 ————— 〈かがみ・まさひろ〉
1957年生まれ。東京学芸大学教授。ヨーロッパ地誌学専攻。『「ジブシー」と呼ばれた人々——東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』(編著、学文社、2005年)、『東ヨーロッパ・ロシア (朝倉世界地理講座10 大地と人間の物語)』(共編、朝倉書店、2007年)
- ◎片岡博美 ————— 〈かたおか・ひろみ〉
1968年生まれ。近畿大学経済学部国際経済学科講師。都市地理学・経済地理学専攻。「エスニック集団の都市流入と都市地域の再編」(村上編著『現代都市地域の構造再編』原書房、2007年)、「エスニック・ビジネスを拠点としたエスニックな連帯の形成——浜松市におけるブラジル人のエスニック・ビジネス利用状況をもとに」(『地理学評論』78-6、2005年)
- ◎澤 宗則 ————— 〈さわ・むねのり〉
神戸大学准教授。人文地理学。「グローバル化にともなうインド農村の変容——バンガロール近郊農村の脱領域化と再領域化」(共著、『人文地理』58-2、2006年〈2007年人文地理学会・学会賞受賞論文〉)、K. ホガート、H. ブラー『農村開発の論理——グローバリゼーションとロカリティ』(共監訳、古今書院、1998年)、『インドの新しい工業化』(共著、古今書院、2003年)、『現代南アジア6 世界システムとネットワーク』(共著、東京大学出版会、2003年)など。
- ◎杉浦 直 ————— 〈すぎうら・ただし〉
1945年生まれ。岩手大学教授。文化地理学・社会地理学専攻。『東北の農村家屋——その地理学的研究』(大明堂、1988年)、『エスニシティの地理学——方法論的展望』(『季刊地理学』50-3、1998年)など。
- ◎千葉立也 ————— 〈ちば・たつや〉
1947年生まれ。都留文科大学教授。社会経済地理学専攻。「地理学における先住民族」(『地理』38-12、古今書院、1993年)、「出稼ぎの町から「ブラジル・タウン」へ——日系人が働く街、

群馬県太田・大泉地域の変貌」(小金澤ほか編『地域研究・地域学習の視点』大明堂、2001年)など。

- ◎手塚 章 ————— 〈てづか・あきら〉
1951年生まれ。筑波大学教授。ヨーロッパ地域研究専攻。『地理学の古典』(古今書院、1991年)、『統地理学の古典——フンボルトの世界』(古今書院、1997年)
- ◎杜 国慶 ————— 〈と・こっけい/Guoqing Du〉
1966年生まれ。立教大学観光学部准教授。都市地理、観光地理専攻。*Tourism and Urban Transformation*, (ed.), Rikkyo University Publication, Tokyo: 2006; *Cities in Global Perspective: Diversity and Transition*, Colege of Tourism, (Yuji Murayama and Guoqing Du), Rikkyo University with IGU Urban Commission, 2005; "Development mechanism of urban system in rapidly changing period in China," *Chinese Geographical Science*, 17(1), 2007. (<http://www.springerlink.com/content/50u554355334q741/>)
- ◎仁平尊明 ————— 〈にへい・たかあき〉
1971年生まれ。筑波大学講師。アメリカ地誌学専攻。『地域調査ことはじめ——あるく・みる・かく』(共編著、ナカニシヤ出版、2007年)
- ◎福本 拓 ————— 〈ふくもと・たく〉
1978年生まれ。大阪市立大学都市研究プラザ・グローバルCOE特別研究員。都市社会地理学専攻。「1920年代から1950年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷」(『人文地理』56-2、2004年)、「大阪における多文化状況の展望と在日朝鮮人——コリアタウンと大阪ビジネスパークの対比から」(『現代思想』33-5、2005年)
- ◎南埜 猛 ————— 〈みなみの・たけし〉
1964年生まれ。兵庫教育大学大学院学校教育研究科准教授。地理学専攻。主な著書に『現代インドを知るための60章』(共編著、明石書店、2007年)、『インド民主主義の変容』(共編著、明石書店、2006年)、『インドの新しい工業化』(共著、古今書院、2003年)、『現代南アジア6 世界システムとネットワーク』(共著、東京大学出版会、2003年)、『アジアの灌漑制度』(共著、新評論、1996年)など。
- ◎矢ヶ崎典隆 ————— 〈やがさき・のりたか〉
1952年生まれ。東京学芸大学教授。地誌学専攻。『移民農業——カリフォルニアの日本人移民社会』(古今書院、1993年)、『アメリカ大平原——食糧基地の形成と持続性』(共編著、古今書院、2006年)
- ◎山下清海 ————— 〈やました・きよみ〉
編著者紹介欄参照
- ◎横山 智 ————— 〈よこやま・さとし〉
1966年生まれ。熊本大学文学部准教授。東南アジア地域研究、地理学専攻。『ラオス農山村地域研究』(共編著、めこん、2008年)、「途上国農村におけるバックパッカー・エンクレープの形成——ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例として」(『地理学評論』80号、2007年)
- ◎吉田道代 ————— 〈よしだ・みちよ〉
1967年生まれ。摂南大学講師。地理学専攻。「オーストラリアの中東難民問題」(『地理』47-10 古今書院、2002年)、「オーストラリアの多文化主義と移民問題」(『図説世界の地域問題』ナカニシヤ出版、2007年)

エ
ス
ニ
ツ
ク
・
ワ
ー
ル
ド
世
界
と
日
本
の
エ
ス
ニ
ツ
ク
社
会

2008年4月20日 初版第1刷発行

編著者 山下清海

発行者 石井昭男

発行所 株式会社 明石書店

〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-9-5
電 話 03 (5818) 1171
F A X 03 (5818) 1174
振 替 00100-7-24505
<http://www.akashi.co.jp>

組版／装丁 明石書店デザイン室
印 刷 株式会社文化カラー印刷
製 本 協栄製本株式会社

(定価はカバーに表示してあります)

ISBN 978-4-7503-2758-7

●山下清海——〈やました・きよみ〉

1951年、福岡市生まれ。筑波大学大学院教授。筑波大学大学院博士課程地球科学研究科地理学・水文学専攻修了。理学博士。1978～80年、文部省アジア諸国等派遣留学生として、シンガポールの南洋大学地理系に留学。1994～95年、カリフォルニア大学バークレー校 Asian American Studies 客員研究員。秋田大学教育学部教授、東洋大学国際地域学部教授を経て、2004年から現職。2005年12月から日本華僑華人学会副会長。専攻は人文地理学、華僑・華人研究。特に日本および世界各地の華人社会・チャイナタウンをフィールドワーク重視で調査研究。

——〈主な著書〉

- 『華人社会がわかる本——中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』（編著）明石書店、2005年
『東南アジア華人社会と中国僑郷——華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』（単著）古今書院、2002年
『チャイナタウン——世界に広がる華人ネットワーク』（単著）丸善、2000年
『シンガポールの華人社会』（単著）大明堂、1988年
『東南アジアのチャイナタウン』（単著）古今書院、1987年